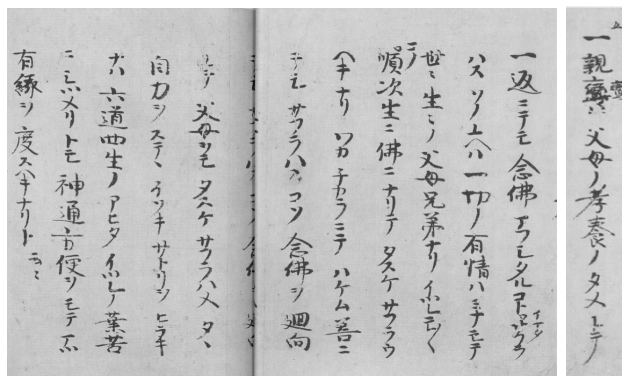


副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第6回（通算第26回）

第五章——ただ念仏と回向（1）

加来 雄之



『歎異抄』第五章（蓮如本・加来試訳）

『歎異抄』第 <u>四</u> 五章	加来試訳（ <u>安良岡訳を参照</u> ）
一五 ①親^{*1}鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたること^{*2}いまださふらはず。 ②そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。 ③いづれも／＼^{*3}この順次生に佛になりてたすけさふらうべきなり。 ④わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。 ⑤たゞ自力をすてゝ、いそぎ^{*4}さとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり。と〔云々〕。	第五章 【(1) 主題】 ①「〔私、〕親鸞は、父母の<u>追善供養</u>のために〔なるのだと考えて〕、一返で<u>あつて</u>も念仏を申したことは、まだございません。 【(2) 理由】 ②その理由は、すべての情けあるものたち（＝生きとし生けるもの）はみなすべてが、次々の<u>世に生</u>まれ変わり、死に変わる父母であり、兄弟なのである。 ③どなたもどなたも、この生の次の生で、仏になって、助けることができるのです。 ④わが力ではげむ善行でもございますならば、念仏を廻らし向けて、〔亡き〕父母をもお助けしましょうけれど、 ⑤ただ〔ひたすら〕自力を捨てて、いそいでさとりをひらいてしまえば、六道や四生〔という迷いの世界に流転する〕中において、どのような〔前世の〕業〔の報い〕による苦しみに沈んでいたとしても、神通力やさまざまな手だてによって、まず〔<u>第一に</u>〕縁あるものを度すことができるのです。」 と〔<u>故親鸞聖人は</u>〕教えてくださいました。

【校訂】

- *1 「鸞」を書きかけ鳥を山となずり訂記、さらに右に「鸞」と訂す
- *2 右行間に「いまだ」三字を補記
- *3 右行間に「この」二字を補記。
- *4 「~~サト~~サとり」——（永）「浄土のさととり」

【『歎異抄』における第五章の位置】

師訓篇——起行訓（利他 3 章から自利 3 章へ）——利他（浄土真宗が関係存在としての救い、もしくは共同体としての救いであることを課題とする。）——三福（『観無量寿経』世福）を手がかりに——世福の中の初めにおかれた孝養父母（善導『観無量寿経疏』の解釈を参考に）

私たちの生命が関係存在であることを規定する二つの根本的な要素としての「親子」関係と「師弟」関係。生存を与えた他者としての両親、思想を与えた他者としての師、との関係が私たちの生き方の様態に決定的な影響を与える、もしくは呪縛する。

	慈心不殺	慈悲
┌生 身命	孝養父母	回向
└命 言葉	奉事師長	自然 如来よりたまわりたる信心

┌人身受け難し今すでに受く……父母と子……宿業
└仏教聞き難し今すでに聞く……師と弟子……言葉

- ・第四章から第五章への展開
「慈心不殺」から「孝養父母」へ
「衆生」から「有縁」へ
「慈悲」から「回向」へ

【第五章の仰せの背景】

- ・第五章の仰せの背景にはどのようなことが考えられるだろうか。
- ・当時の浄土教において、死者に対する追福供養のために念仏読経することや現世の福利のために念仏読経することについて人々からの問いがあったのかもしれない。
- ・第四章の結びに「しかれば念仏まふすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそろうさふらう」とあることから、それを聞いた唯円の、そのようなすばらしい念仏をもうすことによって父母孝養をすればよいのではないかという、個人的な切実な問いがあったのかもしれない。

・もしくは第四章においては利他が「衆生を利益す~~は~~る」という広い対象として示されたので、もっとも身近な父母についてどのようにすればよいのかという教義的関心からの問いがあったのかもしれない。つまり第四章の「衆生を利益する」という普遍的な他者関係の課題語りから第五章の「有縁を度す」という具体的な他者関係への語りへの展開を見るべきか

もしれない。

【第五章の構造】

・第五章①～⑤を試みに大きく主題の提示と理由の説示の二段に分け、さらに理由の説示の内容を二つに分けて考えてみたい。とくに②③と④⑤との関係をどのように受けとめるかが解釈にあたっての課題となる。

(1) 【主題】

- ① 親鸞の念仏の利他とくに「孝養父母」に対する信念の表白

(2) 【理由】

- ②③ 仏道一般としての利他の精神
④⑤ 念仏の道における利他のあり方

このように科文する理由は、それぞれの段落で、以下のように利他の対象、利他の目的が示されており、そこに関心のありようが展開していくことを感じるからである。

対象	目的
① 父母	…孝養のため
②③ 一切の有情	…たすけそうろうべき
④⑤ 有縁	…度すべきなり

(自我個人的・世間道德的関心→普遍的・抽象的他者への関心→特殊的・具体的他者への関心)

・「親鸞は」という名のりからはじまる第五章は、「還相回向」という表現こそ出ないが、親鸞の還相（利他）についての独自の立場を表白する仰せを伝えている。

・第五章は、父母への孝養という具体的で切実な問いを受けて、利他における仏道一般の立場と浄土門の立場の異なりを明らかに示した仰せとして受けとめたい。

・『歎異抄』第五章によって、念仏者にとっての具体的な他者（有縁）との関係のありかた、他者と関わるための原理である「回向」とはなにかが明らかになる。

【第五章の解釈上の課題】

第五章には、解釈の上で課題となる点がいくつかある。いくつか挙げてみたい。

- 1) ①「父母の孝養」が主題とされた背景はなにか。
- 2) ①「孝養」とは具体的にどのような事柄か。
- 3) ① 親鸞は本当に父母の供養のために念仏したことがないのか。もしくは父母の孝養を否定しているのか。
- 4) ②「そのゆえ」はどこまでかかるのか。
- 5) ②「一切の有情」という表現のもつニュアンス。「世世生生の父母兄弟なり」とは

どのような感覚なのであろうか。第四章の「衆生」という表現との区別はあるのか。

6) ③「いずれもいずれも」は、救われる存在を指すのか、救う存在を指すのか。

7) ③「この順次生に」は、浄土への往生を意味しているのだろうか。

8) ④「念仏を回向して」に関わって、孝養と回向との関係。自力回向と本願力回向

9) ⑤「いそぎさとりをひらきなば」(蓮如本)と「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」(永正本)との異なりについて。

11) ⑤「いずれの業苦にしずめりとも」の主語は誰か。父母か、一切の有情か、さとりをひらいた「有縁を度す」存在か。

12) ⑤「神通方便をもて、まづ有縁を度す」の「度す」の主語は誰か。

これらの課題が訳にも関係してくる。

【第五章への疑問】

・「父母の孝養」のための念仏という私たちの心情（もしくは寺院における活動や門信徒の心情）を否定するように見える第五章には受けとめがたく感じる人も多いのではないか。

「極言すれば、「ソノユエハ」以下の文章は、意味するところ極めて不鮮明であって、…乾燥してざらざらしたものだけを読まされる思いがする。」(石田瑞麿 103 頁)

・『歎異抄』の思想と親鸞の『教行信証』などに述べられる如来の還相回向という思想との関係をどのように理解すればよいのか。

・「父母の孝養」という事柄を通して考えなくてはならない私たちの課題は様々な存在する。

父母の孝養に潜む自我関心の問題。(吉凶禍福。幸不幸関心)

関係における平等性という問題。

法要は誰のためなのか。追善供養は、生者のためなのか死者のためなのか。

死者へ関わる方法の問題(回向)

理不尽な命の終わり方をした人びと(例えば戦没者など)へ慰霊という問題。

・「死者」に対する関わり方——生者の慰めとするか、死者を生者のなかに取り込むか。—などなど。

=====

五
一

① 親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたることいまださふらはず。

・「親鸞は」

「親鸞は」という名のりは、以下の言葉が、外ならぬ親鸞の身の事実であり、しかもそれが求道のなかでえる確立することができた自身一個の立場であることを表明しているのであろう。

・「父母の孝養のためとて」

・「父母の孝養」……当時の用法から、ここでの孝養は亡き父母への孝行のために行われる追善供養をあらわす。少し古い時期になるが『日本霊異記』に次のような言葉がでている。

「父母に孝養すれば、浄土に往生す」(『日本霊異記』上)

当時、往生のためには父母に孝養することが当然必要のこととされていたのであろう。

(「孝養父母」のために念仏や法要をするという行為の背景には、『観無量寿経』や早くから受容されていた『心地観経』、『盂蘭盆経』などの影響などが考えられる。ただし善導の『観無量寿経疏』序分義・散善顕行縁に出る二例を見ると、「孝養」の対象は亡き父母だけではなく、生きている父母も含まれている。)

「慈父の恩の高きこと山王の如し 悲母の恩の深きこと大海の如し 若し我世に住して一劫において 悲母の恩を説くとも尽くすこと能わじ」(『心地観経』三、大正蔵3、301頁b)

~~「父母に孝養すれば、浄土に往生す」(『日本霊異記』上)~~

~~——当時、往生のためには父母に孝養することが当然のこととされていたのであろう。~~

・この親鸞の第五章のおおせは唯円たち当時の念仏者のもつ「父母の孝養」という教義の呪縛から解放するものであった。当時、死者への供養を成り立たせる方法が追善回向と考えられていたからであろう。そしてそのことを手がかりに見出されてくるのが「回向」という概念の問題である。

私たちの人生は、父母とどのような関係をもつかによって大きく影響される。自身の人格形成において父母がもつ役割は決定的である。このことから父母への関係性は他者への関係性を考えるときの基盤を与えてくれる。

「一に「孝養父母」と言ふは、此、一切の凡夫みな縁に籍りて生ずることを明かす」(善導『観無量寿経疏』序分義)

~~・七かもここでは「父母の孝養のためとて」となっており、死後の父母への孝養が問題とされている。つまりこの「父母の孝養」は死者である父母への追善供養を意味するものである。そのとき「父母の孝養」という表現には、私たちにとっての二つの課題が托されていると見てもよいだろう。~~

孝……孝行 父母 は、わたしたちの生にとってもっとも根元的な存在でありつつ、
養……供養 死者 としてわたしたちが直接に関わることはできない存在

(ただし、仏に対して供養、父母に対して孝養という見解もある。)

・親鸞は父母をどのような存在として見ていたのか。親鸞が自身の父母について語るとはまったくなく、親鸞が実の父母とどのような関係にあったかは詳らかではない。ただ父・親鸞の子(善鸞や覚信尼?)への心情は、『消息』などに吐露されている。ただ「行巻」の

両重の因縁や皇太子聖徳奉讃などから、親鸞が、「父母」という概念に肯定的なイメージを託していたことを窺うことはできる。

・父母について

大慈救世聖徳皇 父のごとくにおわします

大悲救世観世音 母のごとくにおわします

(『皇太子聖徳奉讃』)

・子のおもい

子の母をおもうがごとくにて

衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず

如来を拝見うたがわず

(『浄土和讃』 諸経意、『聖典』(第2版) 588 頁)

—
—

・「一返にても念佛まふしたること*²いまださふらはず。」

・これは親鸞は、「父母の孝養（追善供養）」という目的のためには、ただの一返であっても念佛を手段としてもうしたことは、いまだにございませんという言説である。「いまだ」は、「今だに」の意で、否定の語を伴って、現在でもなお事柄が実現していない意をあらわす。では、いつから今までなのだろうか。第二章の法然の「ただ念佛してみ弥陀にたすけられまいらすべし」というおおせを受けとめたのちということで理解したい。

・「念佛をもうす」ことは何かの手段ではない。個人的な感情のために念佛を利用することを強く否定する言説である。

・「(180) 一 蓮如上人、仰せられ候う。「信のうえは、とうとう思いて申す念佛も、又、ふと申す念佛も、仏恩に備わるなり。他宗には、親のため、又、何のため、なんとて、念佛をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念佛なり。そのうえの称名は、なにともあれ、仏恩になるものなり」と仰せられ候う云々」(『蓮如聞書』)(『聖典』(第2版) 1060 頁)

法然の教えとの影響関係（この法語には、『歎異抄』第五章の言葉遣いがほとんど含まれている。しかし法然の法語は念佛による父母孝養、なき人への念佛の回向を肯定しているように見える。この法語の思想と親鸞の第五章の思想とはどのような関係にあるのだろうか。これについては次回委しく検討する。）

「一 孝養の心をもてちちははをおもくしおもはん人は。まづ阿弥陀ほとけにあつけまいらすへし。わが身の人となりて往生をねがひ念佛する事は。ひとへにわか父母のやしなひたてたれはこそあれ。わが念佛し候功德をあはれみて。わが父母を極楽へむかへさせおはしまして。罪をも滅しましませとおもはは。かならずかならずむかへとらせおは

しまさんする也。……さ候へはのちの世をとふらひぬへき人候はん人も。それをたのますして。われとはけみて念佛申して。いそき極楽へまいりて。五通三明をさとりて。六道四生の衆生を利益し。父母師長の生所をたつねて。心のままにむかへとらんとおもふへきにて候也。又当時日ことの御念佛をも。かつかつ廻向しまいらせられ候へし。なき人のために念佛を廻向し候へは。阿弥陀ほとけひかりをはなちて。地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へは。此三悪道にしつみて苦をうくる者。そのくるしみやすまりて。いのちをはりてのち。解脱すへきにて候。大経にいはく。若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱寿終之後皆蒙解脱といへり」

(法然『拾遺黒谷上人語燈録』大正蔵 83、254－254 頁)

聖覚『唯信鈔』との影響関係

「諸行往生というは、あるいは父母に孝養し、あるいは師長に奉事し、あるいは五戒・八戒をたもち、あるいは布施・忍辱を行じ、乃至三密・一乗の行をめぐらして、浄土に往生せんとねがうなり。これみな往生をとげざるにあらず。一切の行は、みなこれ浄土の行なるがゆえに。ただこれは、みずからの行をはげみて往生をねがうがゆえに、自力の往生となづく。行業、もしおろそかならば、往生とげがたし。かの阿弥陀仏の本願にあらず。摂取の光明のてらさざるところなり。」(『聖典』(第2版) 1094 頁)